



診察室の午後

白浜はまゆう病院
泌尿器科部長 川嶋 秀紀

私は30代後半の4年間、米国に留学した。最初の1年は臨床の教室で過ごしたが、2年目に生化学・分子生物学教室に移り、わくわくするような基礎研究を楽しんだ。

ところで、私の学位の研究はヒト腎臓の脂質代謝酵素CYP4A11である。この酵素は腎臓の生理や高血圧の発症に関わる重要なもので、私の学位論文がこの酵素についての最初の論文だ。もちろん実験や研究は私が行ったが、成果の英文論文は指導教授が書いてくれた。私の英語能力など全く信用されていなかったのだ。

留学中の話に戻るが、研究成果が出だすと、ボスのアメリカ人教授に論文を書けと言われる。頑張っ飛ばしげな英語で書いて渡す

〈5〉「ご縁」と「神の意思」

と、一瞥(いちべつ)して「very good」と言って受け取られるが、2、3日たって真っ赤な添削コメントが帰ってくる。書き直して渡すと「very good」だが、また真っ赤である。これを何回か繰り返してやっと投稿できた。留学中に書いた数編の論文の真っ赤な添削は今

でも大切に保管している。帰国後も、英文で論文を書くとき、その教授に添削や意見を頂いた。そして、彼とは学会で行動を共にしたり、お互いの家にホームステイしたりして、いろいろな話をするようになった。ある年、木立と芝生に囲まれた彼の古い家で「私は日本では英文論文の書き方を誰からも教わらなかった

言ったら、彼は静かに「キリスト教では、神は瞬時に現在・過去・未来の全てを理解していると考ええる。私たちがこつこつと一緒に仕事をしてきたのも神の意思である」と言われた。文化や意識の違いに少々驚くともなるほどとも思った。

が、先生のおかげで何とか書けるようになったことを本当に感謝していることもに、先生の研究室でお世話になったご縁を不思議に感じていてもありがたく思う」と話したところ、彼の目は少し潤んだようだった。さらに「ご縁というのは不思議なもので、仏教の言葉に由来していると思う」と

留学して過ごした最初の1年は不遇であった。もう一度、基礎医学を勉強しようと思ったのが、お世話になったきっかけであり、大学院での学位論文が評価されて博士研究員として雇ってくれた。「交絡する理由」(因縁)はあるが、なぜそのようなになったかは神のみぞ知るである。

今、ご縁があって現在の病院や地域の皆さまにお世話になっていることがとても大切に思える。